

23 冷えを考慮した排尿障害の管理

名古屋大学大学院医学系研究科 泌尿器科学

**松尾 かずな、松川 宜久、樋口 世、佐井 裕紀、
板東 章子、森 文、内藤 祐志、井上 聡、
佐野 友康、石田 昇平、赤松 秀輔**

頻尿をはじめとして、寒い時期になると症状が増悪することを経験する。冷えを考慮に入れた漢方製剤を使用した症例を報告する。

【60代男性】 安静時振戦を契機に精査中、頻尿にて当科受診。徐々に歩行困難となり、多系統萎縮症と診断された。喉のつかえ感、息のしづらさ、ふらつき、首・肩の凝りを認め、診察時は8月だったが、厚手の下着を着用していた。気持ちの落ち込みもあるとのことだった。舌は紅、歯痕なし。腹診で腹力3/5、心下痞硬を認めた。半夏厚朴湯のみでは改善が乏しかったため、柴胡剤として柴胡加竜骨牡蛎湯、冷えと凝りに対して葛根湯を使用した。多系統萎縮症の症状が増悪し、歩行が難しくなっているが、喉のつかえ感や冷えの症状は残存するものの、症状の増悪なく、安定的な状態が続いている。

【70代男性】 頻尿にて、 α ブロッカーと β 3刺激薬内服にて通院中。問診で、寒くなると症状が増悪するとの訴えがあった。BMIは20未満の痩せ型、寒くなると靴下を二重にしないといけないとのことであり、長風呂になるとのことであった。11月になり、当帰四逆加呉茱萸生姜湯を使用。肩こりを認めたため、さらに葛根湯を加えたところ、症状の軽快をみている。

【60代女性】 尿意切迫感で受診。夜間頻尿3回、BMI 20未満の痩せ型。抗コリン薬を開始したが、尿意切迫感が変わらず。冷えを自覚するようになった。便秘症状も認めたため、大建中湯と当帰芍薬散を開始したところ、便秘は改善。夏になると夜間頻尿は1~2回に減少していた。冬に夜間頻尿で3回起きるとのことであり、当帰芍薬散を当帰四逆加呉茱萸生姜湯に変更し、冬の頻尿症状も2回に減少した。特に寒い場合は、温かい湯に溶かして内服するように指示し、良好な結果を得た。暖かくなった頃には、下垂感や腹の張り感の訴えが強くなることから、大建中湯と補中益気湯に切り替えることで、症状が安定している。

【考察】 漢方製剤の中には、冷えに対応するものがあり、瘀血や血虚、気虚、腎虚などが関係する。一方、冷えとその種類、強さに注目すると、初学者でも、簡単な問診だけで症状に改善する方剤の処方が可能と考えられる。さらに、冷えが強い場合は、飲み方に工夫する。漢方製剤を組み合わせることで、難治性の場合でも対応可能なことが示唆された。